

## 「絵はがき」 5 葉

このコラムをご覧の皆様、初めまして。令和3年度に学芸普及担当へ配属となりました、今塩屋毅行(いましおや たけゆき)と申します。よろしくお願いいたします。

さて、ご挨拶がわりに西都原古墳群に関する「絵はがき」5葉を紹介したいと思います。この絵はがきの裏面(宛名の反対面)はモノクロ写真の印刷面となるものです。発行年代は不明ですが、おそらく大正～昭和10年代(1910～30年代)と考えられます。

### ①「西都原古墳ヨリ発掘セル古器物ノ一部」

きれいな刷り上がりです。画面左奥には綺麗にディスプレイされた石器類、画面中央には経筒のほか、土師器や埴輪、銅鏡、耳環、多頭石斧等が配置されています。経筒は西都原35号墳出土品とみて間違いなんでしょう。円筒埴輪は②の上段右端、多頭石器や板に結びつけられた石器類などは、②の下段写真にも認められます。



なお、表面(宛名書き面)にある「JYOHOKU (城北)SHASHIN INSHATSUSHA」のロゴは、絵はがきの印刷元であるとみられます。

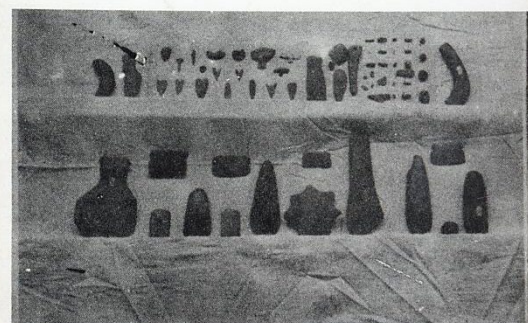
### ②「西都原付近ニテ蒐集セル石器類及ビ西都原古墳ヨリ発掘(掘)セル石器類」

#### 「西都原古墳ヨリ発掘セル土器及ビ埴輪円筒」

掲載写真とキャプションが逆になっています。まず、上段の写真と同じものが、「児湯郡」『宮崎県史跡調査報告』第4輯宮崎県内務部1925年刊の46頁と47頁の間にある挿図にあります。そのことから1925(大正14)年3月頃までに撮影された写真が絵はがきに使用されたものとみられます。

さて、上段写真の中段には提瓶が4個体、その上段に蓋坏の5セットを認めることができます。特に提瓶から察するに、出土品の所在が不明な西都原202号墳(姫塚)のものである可能性があり、本館所蔵品との突合する際の手掛かりとなると思われます。

下段の写真は、「児湯郡」『宮崎県史跡調査報告』第4輯宮崎県内務部1925年刊の50頁と51頁の間の挿図に類似した写真があります。さらに、「児湯郡之部」『宮崎県史跡調査

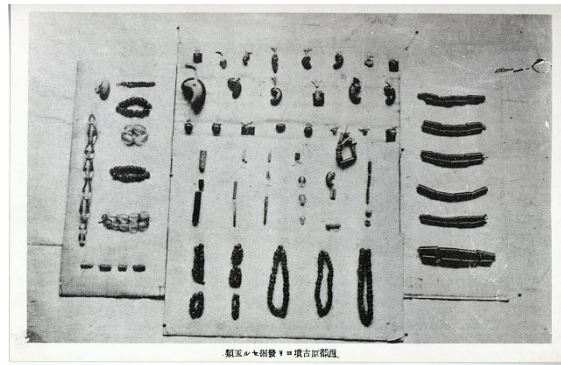


報告』第4輯宮崎県内務部 1931年刊の第2図(254頁目)にも類似した写真があります。そのキャプションによると、石器類は「妻町史蹟保存会」の所蔵品であったようです。

なお、②の下段にはバナナ状に湾曲した石器が2点写っています(画面上段の両端)。これは、天附型石刀(小田 1962・東 2001)と呼ばれるものとみられます。

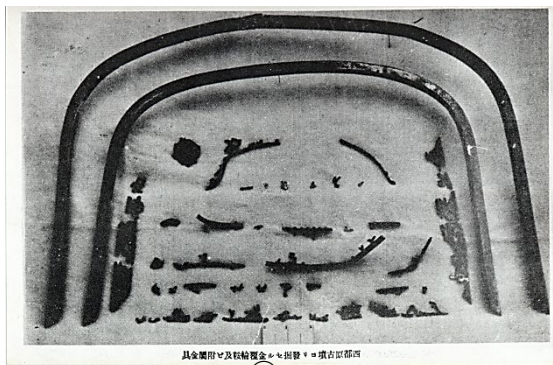
### ③「西都原古墳ヨリ発掘セル玉類」

勾玉・管玉・丸玉・切子玉等の玉類が写っています。各玉類がどの古墳出土のものであるかは判別しにくいですが、画面左側には切子玉の存在が読み取れます。この切子玉については、西都原 202号墳(姫塚)出土品とみられます。

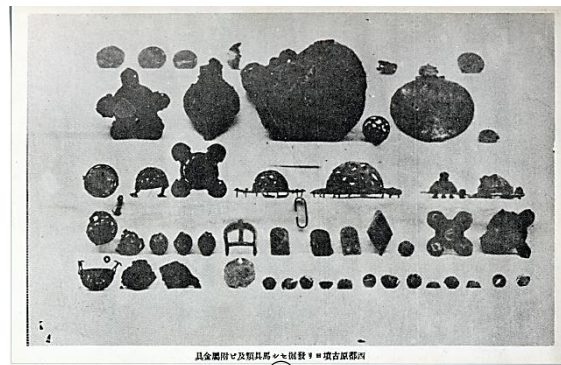


### ④「西都原古墳ヨリ発掘セル金覆輪鞍及ビ附属金具」

### ⑤「西都原古墳ヨリ発掘セル馬具類及ビ附属金具」



④



⑤

④と⑤は、のちに国宝「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」(以下、国宝馬具と略す)となる写真を絵はがきに仕立てたものと考えられます。④は鞍金具、⑤は鏡板・杏葉・辻金具・その他の金具類がピックアップ的にレイアウトされた写真です。

注目されるのは、⑤に鎖付の壺鐙様のもの(画面中央)が写っていることです。これは伝西都原古墳群出土とされる壺鐙(当館所蔵)とも考えられますが、形状に異なる部分もあることから、別物である可能性もあります。少なくとも、国宝馬具が本県にあった頃に撮影された写真であり、保存状態や内容を具体的に知ることのできる歴史的資料とも言えます。

さて、近代日本における絵はがきは、明治 37(1904)年に始まるとされ、武田信也氏は、絵はがきには「歴史資料と画像資料の二つの顔がある」とされています(武田信也 2016)。さらに武田氏は絵はがきの発行された背景を考える重要性も説いています(前掲)。西都原古墳群に関する絵はがきは、ここで紹介した考古資料に関するもの以外にも、古墳(鬼の窟古墳など)の写真を掲載したものもあるようです。

発行年代や誰が何の目的で発行したのか、まだまだ謎の多い絵はがきではありますが、この絵はがきを古墳保護の意識啓発に活用しようとした人物がいます。「史蹟主事」として宮崎県の文化財保護に尽力した「瀬之口傳九郎」です。

当館では、この「瀬之口傳九郎」に関するコレクションギャラリー展（2021年6月16日～7月4日）が目下開催中です。彼の事跡をたどりながら、大正～昭和10年代における宮崎県の考古学研究と文化財保護のあり方を振り返る展示です。さらに常新展示の一環として、彼が発掘調査した六野原古墳群の出土品も蔵出し展示として陳列中です。ぜひ、ご覧ください。

蛇足ですが、今回ご紹介した絵はがきは未使用ですので、一般的な数え方は「枚」となりますが、私にとっては、西都原古墳群を今に護りつないでくださった大切な人々からの絵はがきであるので「葉」と数えています。

今後とも継続的に情報収集を進めて、何か新しい知見が得られたらコラムに書き起こしていきたいと思います。

#### 参考文献

小田富士雄 1962「九州の縄文時代石刀・石剣（三）宮崎県西都原附近発見の石刀」『九州考古学』第15号 九州考古学会

武田信也 2016「絵はがきの語る歴史」『宮崎県文化講座紀要』第42輯 宮崎県立図書館

東和幸 2001「(5)九州地域(熊本県・鹿児島県・宮崎県)の概要と集成」『縄文・弥生移行期の石製呪術具』2 考古学資料集17 小林青樹編

西都原古墳群付近にて出土した石刀等については、当館学芸普及担当の松本茂氏によるご教示を得ました。